

Photographer: 黄弘川 WONG WANG CHUEN

ウォン・ワン・チュン

(1986~)

略歴●

1986年、香港生まれ。香港から2015年に台湾北部の北埔と呼ばれる漢人移民の多い居住地域に移り住む。北埔では大陸から渡ってきた「客家」の人々の集落を中心に撮影を続け、いまも行われている儀礼や習俗、葬式や祭礼、大陸と島々の関係やメンタリティの変容を濃やかに記録し続けている。

2022年に個展「客家ソナタ」を台北の1839当代藝廊で行い、大きな注目を浴びた。2021年には台南のフォトゴー・ギャラリーのグループ展「PHOTO GO」にも参加している。まだ30代前半であり、今後の展開が期待される香港生まれの有望な写真家である。

対象作品●

「客家ソナタ」(2022年)

作品解説●

長期に渡り撮り続けられている本シリーズのテーマは、「移動する民族」と言われる「客家」の人々の現実感と郷愁感である。「客家」は、中国大陸南部の広東省、福建省、江西省などへ北部から移住した人々がつくった独特の生活様式を持つコミュニティであり、土着民からは「外来の人」として差別の対象となった。しかし彼らは反骨心や自立心が強く、太平天国の乱を率いた洪秀全、辛亥革命の孫文、現代中国の最初の実力者となった鄧小平等の革命家や革新者を多数輩出している。

客家はもともとは華北(中国北部)をモンゴルなどの北方系遊牧民族に征服された北宋時代に南へ移住した漢民族の子孫とされる。その言語である客家語は、現在の公用語である北京語が北方民族の影響で大きく変化してきたのに対し、古い中国語の発音を正確に残す。円形土楼と呼ばれる独自の集団住居に住み、団結心が強く、教育熱心で、行動力に富み、海峡を超えて台湾にも多数の人々が移り住み、あちこちに客家集落を形成してきた。

「客家ソナタ」の撮影地である北埔は台湾の客家移住地として最大規模の地域であり、写真家は8年近く継続して客家の生活と住人たちを凝視してきた。特に客家の人々の儀礼や葬儀に惹きつけられ、そのプロセスを丹念に撮影している。

「ここで暮らすようになり、私は週に一度は必ず葬儀に出くわすようになり、たくさんの葬列を目撃してきた。死と生の力がぶつかり、混じり合い、新たな何かへ再生してゆく。目の前のものすべてが一度、崩壊し、再び立ち上がってゆくかのようなこの周期的循環は私の意識に沁みわたり、この独特の感覚と折り合いをつけるために写真撮影を始めた。私は人生の切り離された要素と要素の間の隠された関係を見出すかのようにして撮影を続けている。」

今なお古くからの習慣や伝統を守り続ける客家の人々の日常と現実を、自ら「外来の人」として写真は匂い立つような、力漲るスタイルで記録している。